

# 東林から復社へ——詞臣黃道周をめぐって

## 河内 利治

### 一 論文の目的

明末の天啓崇禎兩期には、政治面や社会面において一つの重要な現象が見られる。「党」あるいは「社」と呼ばれる政治・文学の集団が結成された現象である。<sup>注①</sup>この現象は明末の政治闘争や社会状況を考える上で避けて通ることができないものである。士大夫階級の運動の場、これが「党」であり、青年読書人の運動の場、これが「社」であるが、この二つの運動は、呼名はちがってもどちらも彼等自身が自覚のもとに展開した運動にかわりはない。前者は政治集団「東林党」を、後者は文学集団「復社」を以てその運動の代表とする。時代的には、東林党が先に成立し、復社の出現が後になったが、集団の中で活躍する人士は親子であり子弟であることもあって、<sup>注②</sup>その形態や思想には非常に密接な関係がある。

東林党は、政治的グループとして十七世紀初頭、政界に有力な地歩を占め、ことに天啓初年（一六二一）はその全盛時代と評される。しかし天啓五・六年（一六二五—一六二六）に、反対派の総帥魏忠賢の手によって為された再度の大弾圧に遭って、東林六君子・東林七君子と呼ばれる中心人物が被逮殉難し、一時は全くの崩壊状態を呈した。とは言え東林的気風はこれらの弾圧によって、完全に崩壊し絶滅し去ったのではなかった。

この点について後藤基巳氏は「崇禎時代（一六二八—一六四四）の政界における東林勢力の復活や、党中の人物である劉宗周（一五七八—一六四五）・黃道周（一五八五—一六四六）二氏を中心とする講学グループの発展は、これを裏書きする<sup>注③</sup>」と論じ、劉宗周と黃道周の二人を特に東林から復社への継承発展の中心的存在とみなしている。続いて復社については「東林の後継として小東林とまで異名され

た張溥（一六〇二—四一）・張采（一五九六—一六四八）一派の復社およびこれに呼応する各地の文社の団体として組織された学問的・政治的グループの発達にも注目しなければならぬ」と述べている。

劉宗周が東林党中の代表人物であったことは、その門人黄宗羲の『明儒学案』巻六二蕺山学案で著名であり、かつ『明史』巻二五五劉宗周伝にも「證人書院を築き、同志を集めて講肄す」とある通り、講学グループを形成した点は明らかである。

もう一人の黄道周については、黄宗羲ほどの秀れた門人が輩出したかったのか、研究視野から外れがちである。しかし『明史』巻二五五黄道周伝の「時に體仁奸人を招き東林復社の獄を構ふるに方る。故に道周之に及ぶ」や、『東林列伝』巻十二黄道周伝の「東林を誅戮せんと欲し、草を斬り根を除き、而る後快とするを期したれば則ち先生危し」という陳鼎の言葉、さらに『荷牖叢談』巻二朋党大略の「東林始まりて盟に主たるは、顧・鄒・馮・趙諸賢の如きもの。繼いで高・楊・左・魏・繆・周の如きもの。又繼いで劉宗周・李邦華・文震孟・姚希孟・倪元璐・黄道周の如きもの。最後は張溥・馬世奇・徐汧・夏允彝・楊廷麟諸公の如きものなり。文章節義、世の楷模為り」という林時

対の一文を見ると、黄道周が東林党中の重要な人物であったことは動かしがたい事実であると思われる。また溝口雄三氏が「思想上東林派人士として重視されるべき人物はまだ他にもあり、例えば黄道周<sup>注④</sup>」と論じているが、今後は黄道周をさらに深く考察していく必要があると考えられる。

因って本稿では、黄道周がどのように東林や復社の人士と交際したか、さらに東林から復社へいかに橋渡しをしたかについて考察をすすめることにする。

## 二 東林から受けたもの

東林六君子（楊漣・左光斗・袁化中・魏大中・周朝瑞・顧大章）と東林七君子（周宗建・繆昌期・高攀龍・周起元・周順昌・李應昇・黃尊素）をあわせた十三君子の墓誌銘及び行状や伝記を、一体誰が書き贈ったかを調べてみると面白いことに気付く。一番多いのは、『熹朝忠節死臣傳』に高攀龍等八人の伝記を書いた呉應箕である。次が錢謙益で、『繆公行状』『高公神道碑』『黄公墓誌銘』『周公神道碑』『顧公墓誌銘』（以上『牧齋初學集』）、『李公墓誌銘』（『牧齋有學集』）の六編がある。ついで張溥の『楊公墓誌銘』（『祭魏廓園先生文』『周公墓誌銘』『五人墓碑記』（以上『七錄齋

文集」の四編、そして黄道周の「左忠毅公墓誌」「周忠愍公墓誌」「周忠介公碑」(以上『黃漳浦集』)の三編、さらに倪元璐の「俘丘左公行狀」「周來玉先生傳」(以上『倪寶應本』、陳龍正の「祭魏忠節公」(『幾亭文錄』「高子小傳」(『幾亭續文錄』)の二編と続く。その他一編のものに、葉茂才、朱國禎、錢士升、陳仁錫、范景文、史可法、張燮、吳偉業がある。

ここに名を連ねた面々が、いずれも東林か復社に属する人士である点は、当然の帰結として驚くに値しないが、政客として有名な錢謙益と、復社の盟主張溥やそのメンバーの呉應箕を除くと、黄道周が文章家として、当時いかに有名であったかが分る。それは「左忠毅公墓誌」に見える「天下、能く之を言ふ士、之が銘を為る者多し。而して御史三山公(除行可)、又予に命じて之を銘せしむ<sup>注⑥</sup>」という文章からも窺える。

黄道周は天啓二年(一六二二)の進士で、その時はすでに宦官魏忠賢一派が朝政を専横していた。道周は翰林院庶吉士・編修から経筵展書官となった天啓五年(一六二五)、講筵は尊ぶべきものであるとし、書を奉じて膝行する展書官としての慣例を破って平歩して進んだ。これを見た魏忠賢は目をそばだてたが、どうすることもできなかったとい

う。崇禎三年(一六三〇)、魏忠賢の殘党が袁崇煥事件を口実に東林党の一掃をはかり、旧輔錢龍錫を抹殺しようとした時、道周は一人、錢龍錫救済の疏文を奏上した。この疏文を出発点とし、道周の政治活動は崇禎年間に集中しているが、天啓から崇禎への政治情勢を「左忠毅公墓誌」で次のように言う。

公と諸公歿し、數月ならずして烈皇出づ。魏璫父子は凌遲せられて死し、諸彪虎も各々法に正して誅さる。：故に天人、勝を爭ふの會は、聖人と雖も自ら持すること能はざるなり。其の勢ひ決する者は之と挺んで白はれ、其の綴まること長き者は之と遅れて久し。之を挺白すると遅久するとは、天、之を睨視するに以て其の口を得るが若く、則ち天下に群たる俊傑も其の智力を用ふる所無し。故に謂へらく群小能く鉤繩を操りて人を先に掣し、人を後に曳く。則ち亦た群小の過ちに與するなり<sup>注⑦</sup>。

左光斗は東林派の大弾圧によって犠牲になった一人だが、彼は逮捕された時、「幸はくは讀書し、勉めて善を為し、我を以て戒と為す勿れ」と弟子達に告げた<sup>注⑧</sup>。崇禎帝は即位すると直ちに魏忠賢一派を朝政から驅除し、正義の人士を再び重用したが、しかし数年もたつと、また魏派の殘

党を用いるようになり、結局、左光斗の願いはかなえられなかったのである。道周は左光斗と直接に交流をしていないが、この墓誌を書くに当たって、「劾魏忠賢二十四大罪疏」を書いた楊漣とともに、東林の「大義」を高く評したかったにちがいない。

「周忠愍公墓誌」には、同郷の先人周起元が黄道周に対して、鄒元標と馮從吾が北京に創建した首善書院に赴くよう勧めた話が見える。

公の入りて太僕爲るに方り、予、已に庶常爲り。倅租無ければ、一榻を借り、公に従ひて廳の旁に臥す。公、數ば予に首善に過ぎらんことを約し、予、數ば敢てせずと謝す。孫宗伯の至るに及び、數ば三案の事を談じ、予も亦た微に異同有り。然れども公、是を以て予を不學と謂はず。<sup>注⑩</sup>

翰林院編修を授けられたばかりの道周は、首善書院に赴き朝政について特に三案事件について思う所を述べた。三案事件は東林と反対勢力との抗争であるが、この政権争いを道周がどのようにみなすかは、東林派の人々にとって関心事であり、それゆえこの質問が、道周が正義の士であるかどうかのテストだったと考えられる。「然れども公、是を以て予を不學と謂はず」とは、生々しい歴史をしっかりと

把握できていないものの、一応テストに合格した言葉と解せよう。孫宗伯は礼部尚書の孫慎行を指すが、都御史の地位にあった鄒元標とともに、当時の東林派におけるリーダーであり、こういった時代を担う人士との面識を持たせようと、周起元が道周に働きかけたともみなせよう。

周起元との交際は公私に亘っており、莊起鵠編「漳浦黃先生年譜」の天啓三年の項に見える話がそれを裏付ける。進士となった道周は母親を都に迎えようと、妻林氏とともに故郷を旅出したせたが、嘉興まで来た時、林氏が病卒した。その折、蘇州巡撫の任にあった周起元の尽力によって、葬儀を無事済ませ、母親を都に迎えることができた。道周は言うまでもなく、母親もまた周起元を一生の恩人と感じたのである。それゆえ周起元が逮捕されたと聞くや、数千金を集めて何とか救済しようとした。しかし母親からすれば、数千金でも額が少ないと恨めしく思ったというのだから、お世話になったことに対する感謝の気持ちに相当強かったのである。この点は道周が同郷の親友張燮の弟姪叔に宛てた手紙によっても窺える。<sup>注⑪</sup>

さらに周起元の柩が故郷の海澄に帰り、祠が建てられた時、黄道周は肅然として五律四首を詠じた。<sup>注⑫</sup>その第四首の領聯と頸聯で、

一時同燼者 一時 燼者に同ずるも

千古不灰人 千古 人を灰にせず

龍馬初圖象 龍馬 初めて図象せられ

豺狼已化塵 豺狼 已に塵に化す

「一時、亡国の遺民と同じであつても、永遠の時間人は灰にはしてしまわない。すぐれた人物（周起元）は画像に描かれ、残酷で貪欲な人物（魏派の殘党）はもう塵と化してしまった」と詠じ、周起元の画像を後世まで伝存し、永遠に思慕せんとするのである。

周順昌の神道碑である「周忠介公碑」は、張溥の「五人墓碑記」とあわせ読む必要がある一編である。

蓋し之を聞く、聖學に憤と曰ひ、師風に奮と曰ふ。

奮せず憤らずんば、白日に衆寢ねんと。天啓の末年、上帝假寐するに、奄尹光を吐き、天下を焚灼し、天下瞋然として且する所を知らず。周吏部蓼洲先生起ちて大呼し、以て義馭の必ず且に出でんとし、冰勢の必ず且に消えんとし、狐魅の必ず恃むべからず、齒を嚼み舌を碎き、死を蹈みて悔いずと爲す。嗚呼、百世に奮奮して之を爲すものに非ずや。<sup>注②</sup>

「聖學に憤と曰ひ」は『論語』（述而）の「発憤して食を忘る」をふまえ、「師風に奮と曰ふ」は司馬遷（報任少卿

書）の「常に奮して身を顧みず、以て国家の急に殉ぜんことを思ふ」を念頭においた言葉にちがいない。「闇夜は必ず日の目を見る時が来るもの、奄党勢力は必ず跡形もなく消えさるもの、死におもむいて後悔しない」と大呼した周順昌の姿を、永久に発奮する人士とみなす。

「周忠介公碑」と「五人墓碑記」の二編に共通するテーマは、「開読の変」という蘇州における「民変」であるが、それを公的立場・正面からとらえたのが「周忠介公碑」であり、私的立場・側面からとらえたのが「五人墓碑記」と言えるのではなからうか。事の経緯は「周忠介公碑」に鮮烈に描かれている。

なお道周は書家としても有名で、「明末清初六大家」の一に数えられるが、<sup>注③</sup>南京博物院には真跡「周順昌神道碑卷」が収蔵されている。その末尾には「崇禎十二年己卯、玉牒、録綵輯經書通家旧治生黃道周頓首撰并書」と款記があり、この碑文が周順昌没後十三年目に玉牒文として書かれた祭文であることが分る。

以上、黃道周の「左忠毅公墓誌」「周忠愍公墓誌」「周忠介公碑」という三編を通じて、道周と三氏との交際関係の一端を窺った。しかし『黃漳浦集』には、道周の友人である東林派人士の陳仁錫・文震孟・姚希孟・馬鳴起の碑伝

文、明末に殉難した義士の施邦曜・倪元璐の墓誌銘がある。道周はそれらの友人を東林の正義の気風を受け継ぐ者として高く評価している。倪元璐を「天下の偉人<sup>注④</sup>」と評しているのはその一例にすぎないが、彼等との交際を通じて会得したものは、上述した東林の正義の気風だったのである。

### 三 復社に与えたもの

復社の盟主は張溥であるが、彼の墓誌銘も黃道周が書いている。「張天如墓誌<sup>注⑤</sup>」がそれであるが、北京の故宮博物院には弘光元年（一六四五）三月と款記のある道周の親筆「張溥墓誌銘卷」が収蔵されている。ただ墓誌銘と若干文字に異同がある。墓誌銘は、蔣逸雪『張溥年譜』によれば、張溥が崇禎十四年（一六四一）五月に卒したとあるから、没後四年目の作と言える。

『明史』黃道周伝に引く「小人勿用」という言葉は、崇禎五年（一六三二）に帝に奉った「放門陳事疏」中の句で、易の師卦上六の爻辞「大君有命、開國承家、小人勿用<sup>注⑥</sup>」に基づく。この疏文と続けて奉った「放門回奏疏」は、門戸の禍によって縉紳が網をはられて落し穴に陥れられ、朝政が小人の手に委ねられたことを批判した抗議文である。こ

の二疏文によって黃道周は籍を削られて故郷に帰ることとなる。崇禎十三年（一六四〇）、黃道周が邪党乱政の罪で逮捕され詔獄に下された時、張溥は死を覚悟で彼の忠純を明かにしようとしたが、崇禎帝は彼を救おうとした戸部主事葉廷秀と監生涂仲吉らをも獄に繋いだのである。翌十四年、周延儒が再度召されて政治に当たったので、張溥は宜興（延儒）を頼り、彼等の救済を催促した。しかし、願いは聞き入れられず、道周は湖南に永戍の身となった。張溥はこの一件がもとで病氣となり、道周の出獄（崇禎十五年）よりも先に死んでしまった。それゆえ道周は「天如の退き、退いて死せるは、則ち皆惟れ余の故なり」と墓誌銘に綴っている。道周を座主と仰ぐ復社の同人陳子龍も、「天如病篤きも、猶は門人と易を講ずるのみ<sup>注⑦</sup>」と、死が近づいても最後まで易を講字した張溥の読書学問の精神を語っている。

「張天如墓誌」の冒頭は、詞林に籍をおく者の責務を訴え、当世の文学思潮を非難することから始まる。

國家詞林の重きこと、二百六十年なり。承明の起艸は、率ね東觀より發軔し、是に非ざる自りする者は、雖雉・桑穀に比す。正・嘉の際、間ま一少變するも、未だ大旨を失せず。崇禎に至りて後は、他に寄するを

揆守し、其の主旨失はんことを患へり。而して或ひと謂へらく、三代以上書無く、讀書を好む者は、愚に非ざれば必ず迂と。嗚呼、誠に愚迂ならば、則ち書を舍てて可なり。六蔽の説、何ぞ焉を併せん。<sup>注⑧</sup>

文章の起草は、ほぼ東觀（宮中の著述藏書処）より出發し、そうでないものは、暴風の変を予知して鳴く雛雉や、妖氣の前兆の桑穀といったものでしかなかった、と先ず詞林の文章の優位性を説く。そして、正徳・嘉靖年間は、前後七子の古文辞派が活躍した時代で、この間にやや文章は變化したが、大旨（詞林としての道）を見失うことはなかった。だが崇禎期になってからは、大旨がなくなるおそれがでてきた、と明末の詞林の墮落を悲觀する。末句の「六蔽の説」とは、『論語』（陽貨）の「六言六蔽」を受け、學問を好まないならば、「愚・蕩・賊・絞・乱・狂」の六蔽が、「仁・知・信・直・勇・剛」の六徳を覆い發揮できなくなる、というのである。何よりも詞林の人たるもの、讀書學問に励めと言いたいのであろう。讀書學問の必要性は、この文章を通じて訴えたい主眼であり、この主張が最後まで一貫している。

そんな風潮の中で、讀書學問に勉強した人物として、張溥の存在を高く持ち上げる。たとえば自分と張溥の性格を

比較して「予の性は頑にして且つ鄙なり。見る所の書は寡く、即ち數ば見るも復た記憶せず、且つ直言を以て罪を買ひ、九折幾ど死せんとす。天如既に口訥にして沈黙し、論を持するを喜ばず」と言い、張溥が文章家である点を「予謂へらく、是の一に先生は終に當に文を以て鼎に據るべきのみ」と述べるが、これらはいずれも文章家としての張溥を評價したものとして解すべきであらう。そして張溥の具體的な學問姿勢については、墓誌銘の撰文を道周に依頼し、かつ張溥とともに「婁東の二張」と呼ばれた張采とからめて、「公少きより張采受先と交はり、日夕に一堂の上に講習し、諸々の經史皆手づから錄すること七遍、之を七錄齋と謂ふ。受先既に進士と成り、公益々自ら奮ひ、必ず文章・廉隅を以て砥礪す」と述べる。この姿勢は、道周が墓誌銘中に引用した張采の「張溥日夜經を講じ史を論じ、心に矢つて報稱するを以て、曾ち未だ一日ならずして、官に服し忠を懷き、嚴綸の下に入地し、泣血して自ら明らかにするを得ざりしは、亦た哀しむに足るなり」という疏文と、表裏一体の關係にあらう。<sup>注⑨</sup>

道周には張溥を弔った「哭張西銘」と題する七律が二首あり、その第二首の頸聯に「十年の著作、千年に秘し、一世の文章、百世に師たり」とあるのは、文章家としての張

溥に贈った最大の賛辞であり、この二句を以て張溥を総括すると言っても過言ではあるまい。

また、陳子龍にも「哭張天如先生二十四首」<sup>注6</sup>があり、その第二十首は、張と黄の二人の関係を、後漢の何顒と魏邵になぞらえて詠んでいる。

南冠君子朔風前 南冠の君子 朔風の前

慷慨西行倍可憐 慷慨西行してますます憐むべし

已乏何顒爲奔走 已に乏し 何顒の為に奔走するに

更無魏邵與周旋 更に無し 魏邵の与に周旋するを

何顒は、陳蕃・李膺らが敗れると、陳蕃・李膺と仲がよかったことを理由に宦官に陥れられたので、姓名を変じて汝南に隠れ、何顒を慕う袁紹は、密かに往来し何顒の為に奔走する友人の契りを結んだという（『後漢書』卷六七）。

靈帝の熹平年間、宦官が政權を肆にしたので、氣節の士が集まって攻撃したが、逆に「党錮の禍」に遭ったのである。宦官に陥れられた何顒を詔獄に下された道周になぞらえ、何顒の為に奔走した袁紹を溥に見立てている。また魏邵は、河東太守史弼が誣告によって獄に下された時、変装して家僮となり弼を護衛したが、弼が市に棄てられると、郡人とともに郡邸を売払い、侯覽に賄賂を贈って死罪一等を減じることを得たという（『後漢書』卷六四）。史弼を道

周になぞらえ、魏邵を溥に見立てたことも明らかであろう。

陳子龍については、その父の「陳繡林墓誌」において、黄道周は「今、世に史記・文選を誦する者無く、之有るは惟だ陳臥子のみ」<sup>注6</sup>と評している。この言葉は、黄道周がどのような古典を規範としていたかを述べたものと解することができる。『文選』が必須の古典であるという考え方は、「文は秦漢」をスローガンとした古文辞派の主張とは異なり、さらに『史記』をも掲げている点は、歴史に精通すべき見解として、注意すべきものである。

復社人士との交際関係は、勿論、張溥や陳子龍だけに限られたものではない。むしろその逆で多くの人士との交際があったことが『黃漳浦集』から読み取れる。特に夏允彝・劉同升・趙子春らが親交者として挙げられるが、彼等については稿を改めて論じたい。

#### 四 黄道周の継承伝授における特異性

黄道周と東林や復社人士との交際の様子を、それぞれの代表人物にスポットをあてて追いかけてみた。では道周はこの両者の間にあって、一体何によって何を伝えようとしたのか、その継承伝授における特異性を考えてみたい。



朱彝尊は『静志居詩話』巻二十で道周の実行精神とその具体的行動を総括して次のように言う。

詞臣に言責無し。咎なく譽なきの地に居り、需次して選を待つのみ。石齋先生、翰苑に入るに迫り、上虞の同年倪文貞公と、俱に自ら天下の重きに任ず。正を崇び邪を去り、忠を盡し過を補ひ、裾を引きて折檻し、九死も回らず。先生の詩に云ふ所の「親ら霹靂推車に従ひて過ぎり、又滂沱自在の春を得たり」とは蓋し實録なり。退いて講學するに及んで、杭に於ては則ち大滌の洞天、閩に於ては則ち蓬萊峽、少長咸く集まり、遐邇具に來たる。監史として賓を主るに、琴瑟鐘磬し、濂（周敦頤）洛（二程）の遺風を庶幾ふ。先生の機象の學、辭義深奥にして、後生或は其の指歸に味し<sup>注⑥</sup>。

この一文を読むと、道周が詞臣として、倪元璐とともに東林の氣風を受け継ぎ、講学グループを形成し、講学を通じて知識階級人士にその学問精神を伝授したことが一目瞭然である。政界から正義の士が消え、「詞林と言路の踪跡は微疎たり」<sup>注⑦</sup>なのだが、朝政が小人に操られることに義憤し、何とか文章学問によって腐敗した政治を刷新しようとした。それゆえ、身の処し方の基盤を、經史を中心とした

幅広い読書におき、打開策を講じようとしたのである。要するに六經だけでなく史書に読書範圍を広げたこと、このことに道周の東林氣風を繼承伝授するにあたっての特異性がある。復社のメンバーが史書の著述に名を馳せたこと<sup>注⑧</sup>が、何よりもその証拠である。

その最たる者は、天啓崇禎期の特記すべき人物を列伝体で記した『啓禎野乘』の著者鄒漪であらう。錢謙益は「啓禎野乗序」の中で、「鄒子は漳浦の高弟にして、卒に能く網羅纂集し、以て其の師の志を繼ぐ。漳浦は雲車風馬にして、帝の左右に在り、陰陽を監觀す。故に恒に斯に在るを知る。鄒子尚はくは之を勉めよ、鄒子尚はくは之を慎めよ<sup>注⑨</sup>」と述べ、鄒漪が道周の歴史に精通すべき教えをよく守って『啓禎野乗』を書きあげたと評し、皇帝の側近として人民を安寧に導くことにこそ、歴史をひもとく意義があると述べている。歴史を通して現在を考え、未来を考えていくという視点は、とりもなおさず、次の時代の考証学へと展開していく過渡的規範だったのである。

## 五 結語

文社運動の実態は、復社の組織が端的に示しているように、その發生の当初においては科挙応試を目的とする青年

知識階級の講学団体であり、その中心的主張はまさに張溥のいわゆる「古学を興復し、異日に務めて有用を為さしめ<sup>④</sup>」ことに求められるのであるが、崇禎初年以降、その同人たちの政治的地位の向上とともに、むしろ政治的関心を中心におく政党的存在として活発な政治運動を営むに至った。これらのことを通しても当代知識階級の学問的方向が著しく政治的現実との結びつきにおいて規定されていることが窺われる。この間において特に注目されるべきことは、名教節義を重んじ実学主義を奉ずる当代知識階級士人によって示された実行精神とその具体的行動である。こと黃道周の実行精神とその具体的行動は、上に述べた通りに明末を代表するものであった。この精神と行動は、清朝の考証学へと展開していく上で、欠くべからざるものであったのである。

注

- ① 謝國楨『明清之際黨社運動考』（中華書局）一、引論
- ② 大久保英子「明末読書人結社と教育活動」（『近世中国教育史研究』）によれば、復社同人に魏大中の子魏学濂・魏学洙、周順昌の子周茂藻・周茂蘭、文震孟の子文秉、周宗建の子周廷祚があり、また黃尊素の子黃宗羲は劉宗劉を師とした。魏大中・周順昌・文震孟・周宗建・黃尊素・劉宗周はみな東林派人士で

ある。

- ③ 後藤基巳・山井湧『明末清初政治評論集』（平凡社）解説（総論）による。
- ④ 溝口雄三「いわゆる東林派人士の思想―前近代における中国思想の展開（上）」（『東洋文化研究紀要第75冊』）
- ⑤ 吉川幸次郎「錢謙益と東林―政客としての錢謙益」（『日本中国学会報第十一集』）
- ⑥ 『黃漳浦集』卷二十六「天下、能言之士、多爲之銘者。而御史三山公、又命予銘之。」
- ⑦ 「公與諸公歿、不數月而烈皇出。魏璫父子凌遲死、諸彪虎各正法誅。…故天人爭勝之會、雖聖人不能自持也。其勢決者與之挺白、其綴長者與之遲久。挺白與遲久、天若睨視之以得其□、則群天下俊傑無所用其智力。故謂群小能操鉤繩、舉人於先、曳人於後。則亦與群小之過也。」
- ⑧ 「幸讀書、勉爲善、勿以我爲戒。」
- ⑨ 『黃漳浦集』卷二十七「方公入爲太僕、予、已爲庶常。無似租、借一榻、從公廳旁臥。公、數約予過首善、予、數謝不敢也。及孫宗伯至、數談三案事、予亦微有異同。然公、不以是謂予不學。」
- ⑩ 「吾母聞綿翁之變、涕泣闔干、至爲婢兒所笑。母乃愈泣、繼之以雪。今想此懷、猿腸盡絕耳。」
- ⑪ 『黃漳浦集』卷三十九「周中丞楨、至不及走問、入漳值已建祠、致拜肅然、四章。」
- ⑫ 『黃漳浦集』卷二十五「蓋聞之、聖學曰憤、師風曰奮。不奮

不憤、白日衆癡。天啓之末年、上帶假寐、奄尹吐光、焚灼天下、天下瞋然不知所且。周吏部蓼洲先生起而大呼、以爲義馭之必且出、冰勢之必且消、狐魅之必不可恃、嚼齒碎舌、蹈死不悔。嗚呼、非憤奮於百世而爲之乎。」

⑬ 文物編輯委員會編『書法叢刊』第八輯による。

⑭ 『黃漳浦集』卷二十七に「倪文正公墓誌銘」を収録。

⑮ 『黃漳浦集』卷二十六に収録。

⑯ その他同じく象伝に「大君有命、以正功也。小人勿用、必亂邦也」とあり、既済九三爻辭にも「高宗伐鬼方、三年克之、小人勿用」とある。

⑰ 「張天如墓誌銘」冒頭の洪思の注記に「天如病篤、猶與門人講易」<sup>①</sup>とある。

⑱ 「國家詞林之重、二百六十年矣。承明起艸、率發勅東觀、自非是者、比於雖雉桑穀。正嘉之際、間一少變、未失大旨。至崇禎而後、揆守他寄、其大旨患失。而或謂三代以上無書、好讀書者、非愚必迂。嗚呼、誠愚迂、則舍書而可。六蔽之說、何偏焉。」

⑲ 「予性頑且鄙。寡所見書、即數見復不記憶、且以直言賈罪、九折幾死。天如既口訥沈默、不喜持論。」

⑳ 「予謂、是一先生終當以文據於鼎耳。」

㉑ 「公少與張采受先交、日夕講習一堂之上、諸經史皆手錄七遍、謂之七錄齋。受先既成進士、公益自奮、必文章廉隅砥礪。」

㉒ 「以張溥日夜講經論史、矢心報稱、曾未一日、服官懷忠、入地嚴綸之下、不得泣血自明、亦足哀也。」

㉓ 『黃漳浦集』卷四十七に収録。

㉔ 『陳子龍詩集』卷十七及び『陳忠裕公全集』卷十九に収録。

㉕ 『黃漳浦集』卷二十六「今世無誦史記文選者、有之惟陳臥子。」

㉖ 「詞臣無言責。居无咎无譽之地、需次待選而已。迨石齋先生入翰苑、與上虞同年倪文貞公、俱自任天下之重。崇正去邪、盡忠補過、引裾折檻、九死不回。先生詩所云、親從霹靂推車過、又得滂沱自在春、蓋實錄也。及退而講學、於杭則大滌洞天、於閩則蓬萊峽、少長咸集、遐邇具來。監史主賓、琴瑟鐘磬、庶幾濂洛之遺風焉。先生獲象之學、辭義深奧、後生或昧其指歸。」

㉗ 『黃漳浦集』卷二十五「姚文毅公碑」に「忠烈先後發疏、皆從先生質疑義。先生亦匡直不辭云。故事、詞林與言路踪跡微疎。先生獨謂胥史法從離若蟬翼、即後世誰從明其若否者」とある。

㉘ 例えば、張溥には『史論』二編があり、文秉には『烈皇小識』六卷・『先撥志始』二卷があり、夏允彝には『幸存錄』一卷がある。黃道周自身にも『斲齋前編後編』があり、また『黃漳浦集』卷三十一には史実に関する雑考が四十二編も収録されている。

㉙ 『牧齋有學集』卷十四に収録。「鄒子漳浦高弟、卒能網羅羣集、以繼其師之志。漳浦雲車風馬、在帝左右、監觀陰陽。故知恆在于斯。鄒子尙勉之哉、鄒子尙慎之哉。」

㉚ 『復社紀略』卷一「興復古學、將使日者務爲有用。」

(筑波大学大学院博士課程後期)